映像制作ワークショップの創造性

－「札幌国際芸術祭 2017CM 映像制作ワークショップ」の考察－

東海大学　石垣尚志

1　目的

この報告の目的は、他の参加者やプロの音楽・映像制作者との協働作業のなかで、どのように創造性が生み出されるのか、ワークショップのなかでどのようにアイデアが具体化・言語化していき、作品が制作されたのかという創造のプロセスを考察することである。事例として「札幌国際芸術祭 2017CM 映像制作ワークショップ」（以下、CM 制作ワークショップ）を考察する。

2　方法

2017 年 8 月～10 月、北海道札幌市において第 2 回目となる「札幌国際芸術祭 2017」が開催される（第 1 回は 2014 年に開催）。この芸術祭の CM 映像を制作する「札幌国際芸術祭 2017CM 映像制作ワークショップ」（以下、CM 制作ワークショップ）が 2016 年 7 月～2017 年 3 月に実施された。北海道内の高校生～大学院生（24 歳以下）を対象として、プロの制作者（指導役の映像・アニメ制作者、音楽は芸術祭ゲストディレクターの大友良英）とともに、プロ用機材を用いて CM 映像を制作した。

25 名から 28 企画の応募があり、アニメーション 3 本・実写 2 本の 5 企画が採択された。不採択となった応募者には企画メンバーとしての参加を促し、13 名がメンバーとして参加し、4 名（1 チーム）は CM 制作ワークショップのメイキング映像制作として参加した。18 名の参加者がアニメーション 3 チーム・実写 2 チームに別れて制作を行うこととなった。このように企画不採用者の参加を促したのは、ワークショップ参加者の裾野を広げるためであり、かつ企画者のプロデュース能力（他のメンバーとの協働作業をまとめる）を育成するためでもある。

芸術祭ゲストディレクターの大友良英と参加者の全員が参加する全体ワークショップは 4 回（その他に音楽の録音が 1 回）で、それ以外は各チームで CM 映像制作を行った。また、一般市民が参加する制作ワークショップが 2 回実施された（アニメーション 1 本、実写 1 本）。本報告では、全体ワークショップ（2 回）、市民参加のワークショップ（1 回）、完成披露試写会への参加、ワークショップ実施団体と学生企画者へのインタビュー、CM 制作ワークショップ参加者へのアンケート調査をもとにして考察を行う。

3　考察

ワークショップは参加者の意識化（問題意識や当事者意識）を促し、相互作用のなかで創造性が生み出されるプロセスであると言われる。また、市民参加型の芸術創作活動（ソーシャリー・エンゲイジド・アート）では、制作された作品（結果）だけではなく、市民参加の制作プロセスが重視される。さらに、参加者の関与を深めるためには「オーナーシップ（当事者意識）」を感じさせるような工夫が必要だとも指摘される。

このような問題意識にもとづき、本報告では 3～4 作品の CM 映像（各 30 秒）を取り上げ、CM 映像制作ワークショップのプロセスを具体的に見ていく。全体ワークショップでの議論の内容、関係者へのインタビュー、参加者アンケート調査の結果にもとづいて、協働作業における創造のプロセスを考察する。